

平成24年度日本医学図書館協会近畿地区会，日本薬学図書館協議会近畿・中国・四国・九州地区協議会，近畿病院図書室協議会共催実務者研修会「相互貸借：私の悩み，わたしの工夫」参加報告

和田 崇*

奈良県立医科大学附属図書館

I. はじめに

平成24年10月30日，京都大学楽友会館において，平成24年度日本医学図書館協会近畿地区会，日本薬学図書館協議会近畿・中国・四国・九州地区協議会，近畿病院図書室協議会共催実務者研修会が開催された。

今回の研修会は「相互貸借：私の悩み，わたしの工夫」と題して，相互貸借（以下ILL）担当が現在抱えている問題や，実際の業務で行っている各機関の工夫などについて，問題提起だけではなく，解決策の提案も含めた討議を目的として開催された。

参加者数は30名となり，講演者3名，スタッフ7名を入れ総勢40名という，当初20名くらいと見込んでいた人数を大幅に上回る事となった。

当日は大きく前半と後半に分けて行われ，前半では基調講演及び，二つの機関からの事例報告が行われた。

後半では参加者全員によるディスカッションが行われ，前半の登壇者が参加者からの質疑に答える形となった。

参加者からも活発な意見が多数寄せられ，各機関の担当の現状や，相互の改善点などが話し合われた。

II. プログラムについて

プログラム前半では神戸常磐大学図書館の石川明子氏が進行役を行い，大阪大学附属図書館生命科学図書館の諏訪敏幸氏による基調講演と，筆者（奈良県立医科大学附属図書館）及び，京都府立医科大学附属図書館の山下ユミ氏による事例報告を行った。なお基調講演，事例報告に使われたスライド資料は，日本医学図書館協会Webページに掲載されているので参照されたい¹⁾。

1. 基調講演

基調講演の諏訪氏からは，大阪大学附属図書館生命科学図書館での事例に基づいた，ILLサービス全体の在り方についての報告があった。

その中で，利用者との接点を増やすということに重要視されており，現に大阪大学附属図書館生命科学図書館では，ILLの申込に対し図書館システムを介したWeb申込は行っていないということであった。

これは一見すると利用者にとって不便な運用のように思えるが，利用者と図書館員が直接対話することにより，Web申込みではできない詳細な質疑応答が可能となり，逆に手間と時間の短縮につながっているとのことであった。

さらに利用者，図書館員双方にとって，コミュニケーションスキルを向上させる機会となり，結果的に利用者自身の文献検索に対するスキルの向上や，図書館業務に対する理解も得られるという経緯が説明された。

またILLサービスに限らず，利用者と積極的に対話するという事は，図書館サービス全体に対する利用者側のニーズを知ることにもつながるということであった。

2. 事例報告

次に筆者が奈良県立医科大学（以下奈良医大）の事例を報告した。奈良医大での事例では，病院誌，看護研究誌などの入手困難な文献の入手方法として，文献複写の依頼が可能な病院図書室の紹介を行い，またその入手手段の利便化を図る方法の一つとして，機関リポジトリを紹介した。こちらの事例報告の詳細は，奈良医大機関リポジトリ「GINMU」へも掲載されている²⁾。

続く京都府立医科大学の山下氏からの報告では，2004年から2011年までのILL件数（受付，依頼両方）の推移や，依頼先館への過剰な申込重複を避けるための日計表の紹介など，日常業務の詳細な報告があった。また現在直面している問題点として，電子ジャーナル（以下EJ）の所蔵確認方法などをあげ，後半で行うディスカッションでの話題を参加者に投げかける形でまとめられた。

*Takashi WADA：ヘルスサイエンス情報専門員（基礎）
〒634-8523 奈良県橿原市四条町840.
Tel.0744-22-3051（内線2392） Fax.0744-23-3273
tata-rin@naramed-u.ac.jp （2013年1月16日 受理）

3. 全体討議

休憩をはさみ行われた後半の全体討議では、筆者の所属する奈良県立医科大学附属図書館の鈴木孝明氏が進行役を行い、前述のように前半での3名の登壇者がステージ上に居並び、参加者からの質問に答える形になった。

参加者全員の自己紹介ののち、事前アンケートという形で参加者へ配布していた、各機関の業務状況に関する設問事項を話題として、ディスカッションが行われた。事前アンケートの設問は全部で6問あり、事前に得られた詳細な回答は日本医学図書館協会Webページ内¹⁾にて閲覧可能となっているので、そちらを参照されたい。ここでは設問別に当日議論された内容を記載する。

設問1. 担当者の実情（兼任、人数など）

小規模大学や病院図書室などでは、他業務との兼任をしているケースがほとんどで、ILLの専任スタッフが常駐している大規模図書館のように、利用者との直接対話による受付は、人員や時間の関係上、厳しいという声が聞かれた。

設問2. 灰色文献の所在確認・入手方法について

この設問では、そもそもその「灰色」の定義とは何かという質問や、Epub文献（オンライン上でのみ公開している文献）の入手方法についての質問があった。

灰色文献の定義については、非売品の資料など、流通経路が不確定（一般の商業ルートでは手に入らない）で、また発行部数や、その配布先も極めて少ない資料のことをいい、ここでは上記のEpub文献や、地方学会誌や病院誌などが、それに該当する旨が説明された。

またEpub文献の入手方法については、基本的に出版社の複写に関する規定に従う必要があるが、現状では依頼先館の裁量に委ねられていることが報告された。

またそれら灰色文献の入手に有効な手段となる機関リポジトリの紹介や、複数機関で運営することで、より広い範囲での文献の提供が可能となる、共同リポジトリなどについても言及された。

設問3. 文献送付方法（郵便、メール便など）

ここでは、配送価格や送付期間の長短、また事故率（未配など）などについて議論された。価格については各配送業者によって格差があることは分かっていたが、同じ業者でも地域によってかなりの格差が存在していることが明らかとなった。

設問4. 申込者への通知方法（館内掲示、メール連絡など）

各機関ともメールでの通知がほとんどであったが、急ぎの場合のみ電話連絡というところも多く見られた。しかし中には、利用者の自主性に任せ、通知自体をしないという機関や、館内掲示のみの機関もあった。

設問5. 申込者からの料金の徴収方法（現金、銀行振込、研究費払い対応など）

各機関とも料金の未払い問題が重要視され、中には事前払いを義務付けているところもあった。

さらに最近では公費での支払いを認めているところも多く、月末などに研究費から引き落としを行うことで、未払い問題を解消することが出来るとのことであった。

設問6. その他、業務上工夫されていること、悩んでいること

この設問では、ILL業務全体の質疑応答となり、参加機関同士での活発な話し合いが行われた。

その中で、大学図書館以外のILL相殺支払システム未参加館からの申込みに対して、主に国立大学では現金書留での支払いのみ認めているが、振込みなどにも対応してほしいとの要望があった。この要望に対して、参加していた国立大学の担当者からは、事前に事務手続きすることで対応可能であるとの回答が得られた。

また参考調査の受付において、インパクトファクターの調査など、所蔵資料の照会以外の調査も含めてよいものかという質問があったが、各機関とも特に問題はないという結論に達した（ただし、依頼先館の繁忙度合いを留意する必要がある）。

その後、設問2.でもあったEJのみで閲覧可能な文献について、各担当者からその入手先の紹介や、どうしても手に入らない資料の取扱いについて質疑などが上がった。しかしながら、Epub文献などは取り扱う出版社の規定による複写制限があるため、決定的な入手方法の提示は難しく、利用者への理解を求めることと、今後、機関リポジトリが普及していけば、著者最終稿という制限はあるが、閲覧できる可能性があることが示唆された。

また事例報告で山下氏から投げかけられた、EJの所蔵確認方法であるが、こちらもまた現在のところ決定的な解決方法は提示することはできなかったが、CiNiiBooksなどでもEJの書誌登録も徐々にではあるが増加しており、また主に国立大学などで、フリーアクセス可能なEJの一覧を作成している旨も報告された。

最後に大阪大学諏訪氏から、「ILLとは「相互」協力事業であり、自館（利用者も含め）の都合のみ考えてはいけない。そこには「相手機関」というものが存在し、それぞれの機関の立場を考慮する必要がある」というまよめの提言がなされ、閉会となった。

4. 会場について

会場となった京都大学楽友会館（京都市左京区吉田二本松町）は、国の登録有形文化財にも指定されている大正14年建設の施設で、大正当時の雰囲気を残しつつも、研修施設として、映像や音響設備などの機能も整えられている大変に素晴らしい会場で、充実した研修を行うことができた（写真1及び2³⁾）。

また閉会後には京都大学様のご厚意で、医学図書館の見学会も行われた。

Ⅲ. まとめ

今回の研修会では、前述のように多数の機関が参加となり、機関ごとの工夫や悩みを確認することができ、また他機関への要望や自館の改善点などについても再認識する機会となり、各機関にとっても実りのある研修会になったのではないだろうか。

このような実務者レベルでの会合は、担当者のスキルアップや、各機関との交流を深めることになり、業務の効率を向上させる機会となるため、今後も継続していくことを望む次第である。

最後に、この研修会の開催に当たり、ご尽力いただいた、NPO法人日本医学図書館協会近畿地区会、日本薬学図書館協議会近畿・中国・四国地区協議会、近畿病院図書館協議会の研修会実行委員の方々、そして当日のご登壇者様及びすべての参加者の皆様方に御礼申し上げます。



写真1. 楽友会館外観



写真2. 会場内（2階会議・講演室）の様子

引用サイト

- 1) 日本医学図書館協会近畿地区シンポジウム／実務者研修会[internet]. http://plaza.umin.ac.jp/~jmla/chikukai/kinki/practical_24.html [accessed 2012-12-17]
- 2) 奈良県立医科大学機関リポジトリGINMU：「ILL事例報告機関リポジトリ(IR)との関連」[internet]. <http://hdl.handle.net/10564/2326> [accessed 2012-12-06]
- 3) 京都大学楽友会館[internet]. <http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/profile/intro/facilities/kyoshokuin/rakuyu/> [accessed 2012-12-06]